５．学識経験者の皆さまからのコメント

八戸市では、14 ページにあるように、コアメンバー会議として下記の学識経験者方々を中心に、駅西地区の賑わい創出についての意見交換を実施してきました。

記

柏の葉アーバンデザインセンター　副センター長	三牧　浩也　様
マチニワアドバイザー	山下　裕子　様
八戸工業大学　工学部システム情報工学科　教授	武山　泰　様
八戸工業大学　工学部土木建築工学科　助教	西尾　洸毅　様
八戸学院大学　地域経営学部　教授	田中　哲　様
八戸学院大学　学務部	松山　政義　様
八戸工業高等専門学校　産業システム工学科　准教授	金　善旭　様
クロススポーツマーケティング株式会社	青山　英治　様

このうち、八戸市内の学識経験者の皆様から、今回の全体会議について以下のとおりコメントをいただいていますので紹介します。

八戸駅西地区のまちづくりについて

八戸工業大学　工学部システム情報工学科　教授　武山　泰

コロナ禍によって社会情勢が変わるため、外にあるフラットスペースも有効活用しながら、これに対応できるイベント等を検討してはどうか。将来的には色々な団体がイベントを仕掛けるところまで進められるのが理想だが、現状ではハードルが高いであろうことも理解できる。

まずは、賑わい創出のための催し物を地道に継続していくほか、SNS などインターネットを活用していくことも考えられるのではないか。

また、大きな意味で、プロジェクトを成功させるにはプロジェクト憲章を作ったほうが良いと思う。毎回同じような議論をするより、ある段階で検討してまとめたほうが良いと思う。協力メンバーで案を作って、然るべき組織が検討し、こういうまちにしたいという理念を憲章化していたほうが良いと思う。

ここでは、都市計画や地区計画の観点からも、駅西地区に上手く適合していけるように、もう少し駅西地区の特徴等をおさえたプロジェクトとなるように検討していく必要もあると考えられる。

令和 2 年度の駅西地区の活動を振り返って

八戸工業大学　工学部土木建築工学科　助教　西尾　洸毅

駅西地区の活動について感じる想いは人それぞれだと思いますが、人口減少先進地から来た私から見ると、これからの駅西地区の活動に大切なことは継続的に地域住民を巻き込みながら「住民参加型の地域マネジメント」への素地を養うことだと思います。

以前、私は室蘭市でパークマネジメントを行う団体に所属していました。カタカナで書くと格好は良いのですが、公園の近隣住民や大学生有志が、毎年必要になる草刈りや雨水で崩れる散策路の踏み固め等、公園の維持管理を焼き芋やそり滑り、落ち葉プール等と併せて年数回の行事として企画・実施する団体です。企画の実施にあたっては、休日にお子さんと段ボールを集める地域住民の方、部活のない日に樹木プレートを作る高校生とその先生、授業の合間に企画立案や周知に取り組む大学生など、近くに住んでいても普段は顔を合わせないような人たちが各々の日常生活の中で積み重ねた活動があって実施に至ります。立ち上げ当初は連絡手段を含めて様々な困難がありましたが、定期的な話し合いの中で打ち解けあい、地域住民のメンバーから降り積もった雪を利用したアイスキャンドルづくりの企画が新たに提案される等、「地域をもっと良くしたいと願う地域住民が自らの手でその願いを実現する」プロジェクトとして取り組んでいます。このように地域の課題や魅力を肌で感じている地域住民を巻き込みながら継続的に取り組むことで、「住民参加型の地域マネジメント」への素地が養われると思っています。

まちの規模は違えど、駅西地区の活動についても共通点があると感じています。盛り上がり隊の立ち上げとなった今年度は、グループに別れてそれぞれの困難を乗り越えながらも様々な企画が立案・実施されてきました。募集段階から地域住民の方だけでなく、幅広い応募があり、大きな可能性を感じられている地域だと分かります。今後は、固定メンバーで企画の規模を大きくして稼げるまちづくりを検討する等の方向性も考えられますが、既実施の企画に加えて、地域住民や駅西地区で働いている方を主体として従来メンバーがサポートしながら、地域の課題解決や魅力の発揮に焦点を当てた内容・規模で企画を継続的に実施することで、将来的な「住民参加型の地域マネジメント」への素地が養われ、これからの人口減少に向けた糧になると思っています。

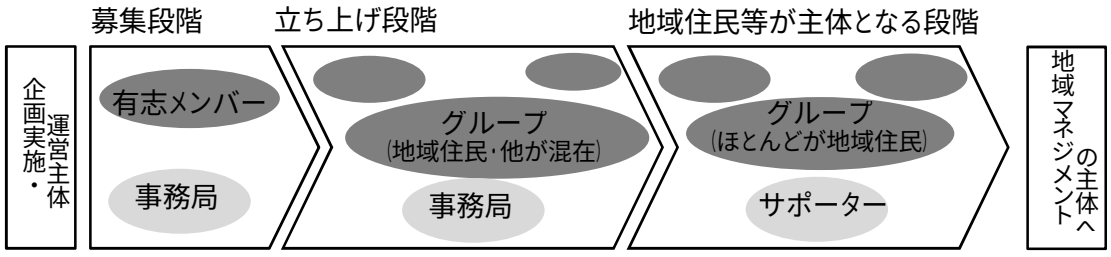

図 「住民参加型マネジメント」に向けた段階構成のイメージ

駅西まちづくりについて

八戸学院大学　地域経営学部　教授　田中　哲

まちづくりとは、樋口兼次によれば、次のように定義される。

「それぞれの都市・地域住民が、まちをどのような場として構想し、その目標にしたがって、住・教育・自然・環境・福祉・労働・交通・買い物等、生活に関するすべての機能をどのように配置していくかの行為」（樋口兼次[1996]）ここでは、生活に関わる様々な機能を、都市・地域住民が主体となって配置していく行為であると位置づけられている。いわば、「参加型」のまちづくりの提起である。ここでは、「まちづくり」の主体は、地域住民であることを確認しておく。

さらに、田村明によれば「地域経営」とはつぎのような考え方であるとされる。

「『地域経営』とは、地域に住んでいる人々が共同して、将来にわたって安全で人間らしく豊かな生活を過ごすために、地域にある資源を発見し、活用し、制御し、保全し、必要ならば他からも資源を導入して有効に組み合わせ活用し、地域を整備し、サービスを行って目的を達成してゆくこと」（田村明[2000]）である。

松橋他[2019]によれば、「まちづくり」にはいくつもの定義が存在し、実践も多様であるという。そこでの共通項は、第一に、行政や特定の企業単独の取組ではなく、様々な人たち（多くの市民、地域団体、行政や企業も含まれる）が担っているということ、第二に、「まち」を暮らしやすく賑わいをもたらすための取組であるということ、第三に、賑わいや暮らしやすさをもたらす取組が他のまちづくりの次の活動に波及していくという期待が込められていることである。

各研究者の見解は以上のようなものであるが、実際に「まちづくり」を行い、まちを育てていくためには、参加したいと思う人々が集い、計画を立て、実行していくことが重要であると考える。

駅西地区については、現在空間となっているところにどのような機能を埋め込んでいくことが必要か、あるいは今ある施設ないしは空間をどのように利活用していくのかということを、組織立って考え、実行していくことが求められる。

＜引用・参考文献＞

樋口兼次「生活圏」の構築と『まちづくり』運動」『生活協同組合研究』1996年 8 月号
田村明[2000]『自治体学入門』岩波書店、2000 年
松橋崇史他[2019] 『スポーツまちづくりの教科書』青弓社、2019 年

八戸駅西地区の取り組みについて

八戸学院大学　学務部　松山　政義

盛り上がり隊の活動は素晴らしいと思います。ぜひ、小さい取り組みでも良いと思いますので継続できる工夫を皆さんと一緒に考えて行けたらと思います。以下、個人的意見になりますが、大学の資源を上手く活用して欲しい。例えば、教員の専門性に合わせた活動が出来ると継続および広報（新聞取材や大学の広報（HP や SNS））が可能である。

地域連携について、八戸駅の発展は郡部との連携も重要となると思われます。八戸駅で行う定期イベントに通ってスタンプがいっぱいになったら沿線上の加盟店で使えるクーポンが貰えるなど八戸駅周辺と沿線の双方にメリットがある取り組み。

最後に、ポイントとしては３つの T（食べること、手ごろであること、定期的であること）が揃うと皆さんに喜んで貰えるのでは？と思います。

八戸駅西地区のまちづくりについて

八戸工業高等専門学校　産業システム工学科　准教授 金　善旭

「まちづくり」にはハード面を強調したまちづくりとソフト面を強調したまちづくりがあります。前者はトップダウン型の都市計画の意味合いが強いです。その一方で、後者はボトムアップ的なもので、こちらの意味で今日最も広く使われており、ソフト面という特徴により全国各地で、様々な実践が行われています。それぞれの実践の形は違いますが、その中には「住民」自らが「地域資源」を活用して当該地域の「変化」を図る行為が求められているという共通点があります。つまり、まちづくりにおいて「住民」・「地域資源」・「変化」という 3 要素は欠かせないものであるということです。

まちづくりの実践を構成する３要素のうち１つも欠かせないものですが、最も重要なのは「住民」です。特に八戸駅西地区のように地域の個性や施設などの地域資源が乏しいところでは住民による構想力がまちづくりを成功させるカギになるかと思います。そういう観点から、盛り上がりという「変化」をもたらすために構想力を働かせて様々なイベントを実践している盛り上がり隊の活動は成功への第一歩を踏み出した。次の一歩を踏み出すためにはもっと多くの住民が主体として参加することが必要だと思います。